

民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題

第 118 卷



南瀛佛教會會報

中國書店

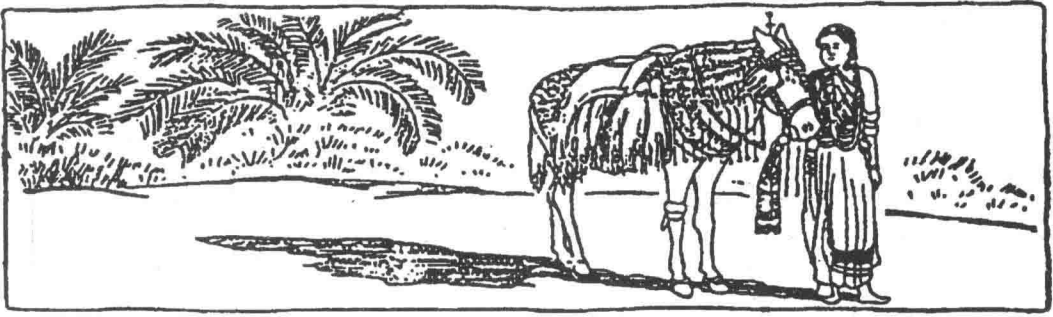
NANEIBUKKYO

XIV. 6

南
瀛
佛
教

號 月 六

行 發 會 教 佛 瀛 南 本 日 大
北 臺

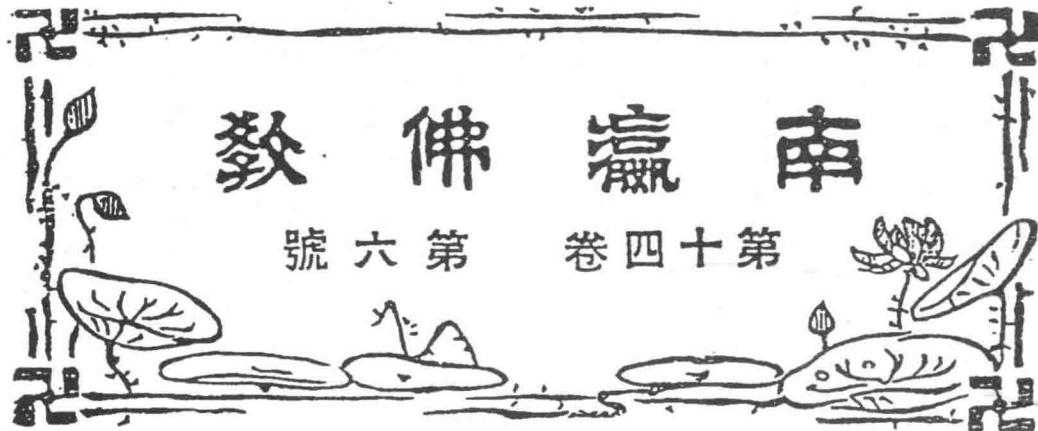


次 目

▲卷 頭 言	一
▲會 長 挨拶	二
▲講習會祝辭	伊藤完二……………四
▲三 寶 の 恩	西岡英夫……………六
▲修道第一義	貫田至道……………三
▲今日の問題	……………三
▲朱子之排佛論	高 執 德……………二
▲大乘起信論註解	陳 常 諦……………三
▲臺灣佛教振興策	李 燃 薪……………三
▲佛教一元論	曾 永 成……………六
▲天主 教 論	張 長 川……………四
▲講習生文藝	……………四
▲懸賞交語謎	……………七
▲臺灣寺廟祭神一覽	……………八
▲漢譯宗教團體法	……………五
▲南 瀛 詩 壇	……………六
▲會 報 雜 報	……………五
▲會費領收新入會員紹介	……………三
▲編輯 後 記	……………三

南 瀛 佛 教

第 四 十 卷 第 六 號



孟子は性善を説き、荀子は性惡を主張したるも、思ふに元來人の性は善でもなく、惡でもないやうである。若し人生れ乍らにして善であるならば、教化の必要なく、又生れ乍らにして惡であれば、教化不可能となるのである。「教なければ禽獸に近し」と云ふ古語は今も尙ほ眞理たることを失はない。

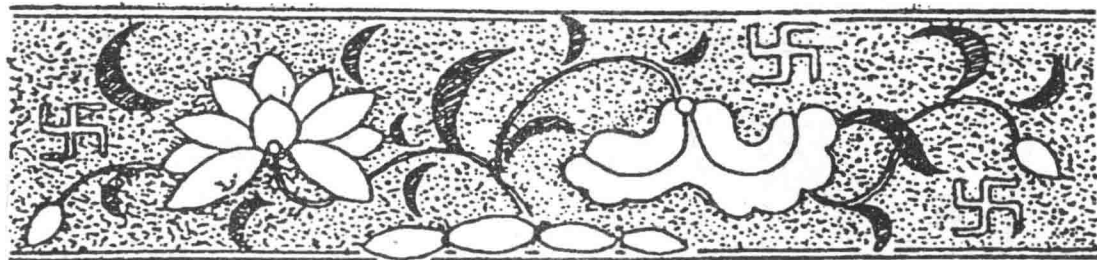
宗教は常に社會と關聯し、社會の教化は常に宗教を中心とする。教化は理想と現實との衝突に出發し、其の調和を計らんとする努力であり、宗教も亦地上に天國を築き、娑婆即寂光淨土たらしめむことを理想とする。人より神に向ふ時は信仰となり、神より人に向ふ時は救済となり、神と人とを結合せんとする所に宗教の特色がある。

宗教は社會の改造、教化等と相提携し得るのみでなく、寧ろそれらの根柢となるものである。現代人の生活を引揚げるものは教化の力であるが、宗教なき道德は源泉なき河流の如く、宗教なき教化は砂上の樓閣の如しである。

信仰信念より迸り出でたる慈善は菩薩行であり、財なきものに財を施し、教なきものに教を施す財法二施功德圓滿を以て宗教的行持とする。

我が國上世に於ける貧民の救済、病者の救護、孤兒の養育、罪囚の教誨、免囚の保護、災變の賑恤等は殆んど宗教家の手に始まり、その活躍に待ち、後には一時は一般教育までも宗教家に任せて居た状態である。聖德太子が四天王寺の建立と共に教田院（教化事業）、施藥、療病の二院（病者の救済）、並に悲田院（貧民給與）を設立せられたのは我國社會事業の先驅である。又國民教育の規範たる教育勅諭と其の賜趣を一にせる佛教は教化方面に於てもよく其の普及を計り、日清、日露の兩役に於ては専ら國民精神の吹込に努め、次で戊申詔書（宣布、近くは精神作興詔書）の敷行に努めたる等、佛教徒協同の教化大なるものあり、現に國內に在る教化團體の多くは佛教徒の手に依つて運営されてゐる。

されど思ふに本島に於ける斯道の活躍尙ほ前途遼遠の感あり、希くは本島文化開發の爲め、宗教家各位の一層の奮闘を期して止まない次第である。



——佛教講習會閉講式に於ける——

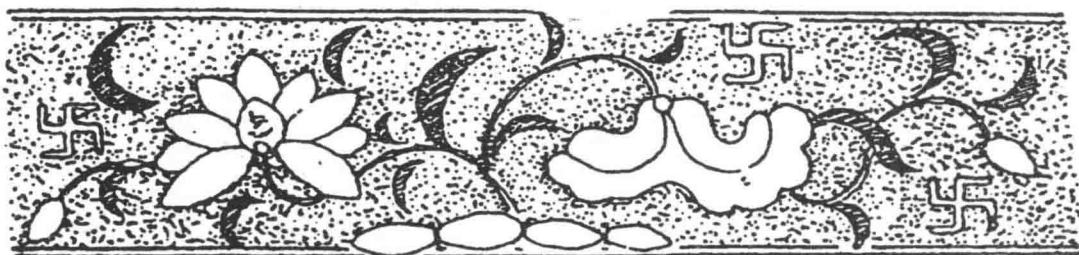
會長挨拶

閉會式ニ當リ一言御挨拶申上ゲマス。本日二週間ニ亘レル第十六回南瀛佛教講習會モ既ニ豫定ノ科程ヲ講了致シマシテ、茲ニ來賓各位御臨席ノ下ニ閉講式ヲ舉行致スコトヲ得ルニ至リマシタコトハ、主催者ニトリマシテ誠ニ光榮トシ欣快ニ堪ヘナイトコロデアリマス。

講師各位ニハ遙々内地カラ御出デ下サイマシタ棲梧老師ヲ始メトシ、教界ノ耆宿新進諸方面ノ方々が御繁忙ノ中ヲ特ニ本會ノ爲ニ御得意ノ方面ヲ擔當御講述下サイマシタコトハ此ノ上ナキ仕合せト存ジ、講習員諸子ト共ニ深く感謝致ス次第デアリマス。

惟フニ寺院佛堂ニハ幾多ノ使命ガアリマセウガ、一ニハ道俗修養ノ道場トナリ、一ニハ人心教化ノ聖場トナルト云フコトハ最も重要ナルモノデアラウト思ハレマス。

然ルニ本島ノ寺廟ヲ通觀スルニ斯ル使命ヲ果シテキルモノハ實ニ少數デアリ、多クノ寺堂ハ單ニ祭禮中心タル民間信仰ノ機關トシテノ存在ニ止マル實情デアリマス。又僧侶齊友ノ數モ相當多數ノ様デアリマスガ、深ク佛教ノ教義教理ヲ理解シ體得シテ、衆俗化導ノ大任ヲ全ウシ得ル者ハ實ニ寥寥ノ如キ實狀デアリマス。コノ爲ニ寺堂管理ノ實權ガ却ツテ在家衆俗ノ手ニ存シ久シキ間佛道ノ正常ナル發達ガ阻害セラレテ居タコトハ誠ニ遺憾ニ堪ヘナイトコロデアリ



マス。

勿論ソレニハ本島ニ於ケル佛教渡來ノ歴史ニ基因スルところが大ナルモノデアツタデアリマセウガ、一ニハ僧侶齊友ガ、眞ニ先覺佛教徒タルノ實力ヲ有セズ、從ツテ一般俗衆ヲ教化誘掖スルニ足ル丈ケノ識見ト德望トヲ具備シテ居ナカツタコトニ依ルモノト思ハレルデアリマス。我が南瀛佛教會ハ本島佛教ヲ生命アルモノタラシムルニハ、舊來ノ寺廟管理上ノ弊習ヲ改革スルコトモ必要デアリマスガ、先ヅ以テ我が會員諸子ノ智德ヲ向上セシムルコトガ最モ肝要ナコトデアルト認メマシテ、御承知ノ如ク、年々佛教講習會ヲ開催シテ參ツタ次第デアリマス。幸ニ此ノ度ノ講習會ハ諸講師ノ義俠的御厚意ト東山寺當局ノ一方ナラヌ御援助ニヨリマシテ茲ニ首尾ヨク終結ヲ告ゲルコト、ナリマシタ。講習員諸子ハ必ズヤ夫々相當ノ成果ヲ獲得セラレタルコト、信ズル次第デアリマス。

諸子ハ此ノ講習ニ依ツテ得ラレタところノ識見ト體驗トヲ基礎トシテ益々智德ノ向上ニ努メラレ特ニ内地佛教ニ學ブコトヲ心掛ケテ克ク大乘ノ教風ヲ養ヒ、會員ハ互ニ一致協和シ相敬愛シテ以テ混沌萎微タル臺灣佛教界ノ肅正振興ノ先驅トナリ十分ナル活動ヲ續ケラル、コトヲ切望スル次第デアリマス。

終リニ當リマシテ諸子ト共ニ講師諸先生ト東山寺當局ニ對シマシテ重ネテ深厚ナル感謝ノ誠意ヲ表明致ス次第デアリマス。

以上ヲ以チマシテ閉會ニ當ツテノ御挨拶ト致シマス。

祝 辭

佛法に道を求め、涅槃の修業を重ねることを將に二週日、爰に佛教講習會閉會式を舉行せらるゝに方り、祝辭を述ぶる光榮を有するは最も欣幸とする處なり。

惟ふに釋尊法を垂れてより茲に三千年、其の教義は幽邃窮りなく、之を鑽けば其の彌々深きを知り、之を求むれば彌々其の高きを識る、因縁の哲理たるや萬古不磨にして大聖釋尊の宏遠なる大理念は滔々として盡きざるものあり、僧籍に身を投ぜられ佛道に歸依し、佛陀の法燈を奉ずる會員各位が大乗佛法に精進せらるゝは世に身を修め家を齊ふに止らず、必ずや無量の衆生を濟度し國家民心の趨く所を永遠に明示するものあるを信ずるものなり。

今や本島の思想界も混沌として押し寄せ來る世相の變調に馴化して將に多事ならんことを、之を思ふとき今此の講習會が各位の佛縁を濃やかにし、迷へる衆生に暗夜の電光を施し、以て世道人心を振作するに大なる力あるを信じ感佩措く能はざるなり。冀くは本講習中修得されたる說法を一大暗示として愈々其の道を鑽き健實なる佛心を培ひ安心立命の大地に起ち以て本島啓蒙の爲め貢獻せらるゝと共に世界人類の爲め、此の教義を宣揚せられんことを庶幾ふて竭まず、之れ即ち鴻大なる佛恩に報ひ且つは本講習を意義あらしむる所以の道なりと信ず。

茲に一言蕪辭を述べて祝辭とす。

昭和十一年四月二十六日

屏東市尹 伊 藤 完

二

謝 辭

本日茲に講習修了證書の授與式に當りまして會長様からは特に懇切なる御訓示を賜はり、尙ほ講師並に來賓方よりも句々志を振はしむる御詞を賜はり、誠に感銘措く能はざる所であります。此の講習二週間に至りまして各講師の熱誠懇切至らざる無き御講義を拜聴し、尙指導員及東山寺當事各位より御世話を蒙りました御恩の多大なるこゝ眞に譬ふる言葉ありません。

此の度の開會に際し關係諸先生の諸般に亘り御盡し下されましたこゝに思ひ及ぼす時、眞にその有難さが心に泌み亘り唯々感激の外ありません。

今後この講習會に於て收得し得ました佛教の教理、國民精神に關する義理等我等日本國民として佛教徒として眞の自覺を以て今後の本島佛教の啓蒙教化に資し以て今回受けました所の廣大なる御恩の萬一に酬ひたいと存じます。

謹んでこれを以て謝辭と致します。

昭和十一年四月二十六日

第十六回南瀛佛教講習會

修了生總代 廖 萬 成



佛の説かれる三寶の恩

西岡英夫

上

佛教で四恩と三寶と云ふことがあり、これはなか／＼大切なこととなつて居る。四恩とは國王の恩、父母の恩、それから衆生の恩と三寶の恩と、この四つの恩を云ふので、三寶と云ふのは佛法僧の三つを指し、この恩は佛教徒は僧であり、信徒である者は、その恩の難有きを思ひ、これに報ひねばならない。三寶と云はるゝ佛は御佛様で、法は經文、僧は僧尼を云ふのである。我日本に傳來の外教たる佛教をして、今日の如く日本化した立派な宗教たらしめた基礎を作られた聖德太子の、有名な十七條の憲法にも、この三寶のことが示されて居る、即ちその第二條に

「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、即ち生の終焉、萬國の極宗なり、何れの世、何れの人、是法を貴ばざる、人として甚だ惡しきもの鮮く、能く教ふれば之に従ふ、これ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直くせん」

と、あるのでも判らうと思ふ。かく三寶の恩と云ふものは、難有い尊いものであります。而してこの恩の難有い、尊いと云ふことは、誰してもよく口にするが、明白に判つて諒解して居る者は多くないやうである。我等佛法を信奉する者は、老若男女を問はず、今、簡

單に佛さまのお話も聞いて居るけれども、もしこの世の中に、佛さまが出現されなかつたとしたら如何であらう、廣大無邊の大慈悲を垂示し給給ふその御姿も、その御恩みの光も、決して仰ぐことが出来なかつたでありませう。我等は誰でも、生まれながらにして父母があり、その父母の愛護の下に、人として道を行ひ成長して居るのでありますが、假にこの父母がないとしたら如何であらう、我等は決して成長しません、いや生活し得ないのであります、然るに于たるものは、その父母に對して、その愛護に對して感謝して、從順に安心すべきだが、數多いの世の中の人の中には、種々の事情もあらうが、父母の意に反した行動をする者があります、まことに不屈千萬ではあるが、これはその愛護の恩を忘れての仕方であるけれども、父母が于たる我等に對しての愛護、慈悲と云ふものが餘に大きく、その抱く心が餘にも廣大なので、これを掴むべく形が見えないのである、例へば月と地球とは等く圓いものであると云はれて居るが、月は我等の住む世界から遠く、その形が見られて圓いと云ふことは、誰も知つて居るけれど、我等は地球の上に住むので、餘りに近く且つ廣大だから、誰もその形を見得ないで、唯だ平に見え、圓く見ないので、學者の説に従つて圓いと知得して居るに過ぎない、

佛さまもこれと同様で、その御慈悲が餘りにも廣大無邊なので、容易にその難有い争ひことが知得し難いのであります。

昔、印度の或街に、一人の偉い僧侶が居た、或日その僧に旅に行つての歸途、盲人ともが大勢集まつて、何か云ひながら騒いで居る所に來合せた、何をして居るのかと思つて、近寄つて見ると、大勢の盲人は一頭の大きな象を取り圍んで、何だかだいろ／＼のことを云つて居ます、これは面白と思つて立ち止まり聞いて居ると

「さア、象を連れて來たよ、一頭象と云ふ獸は、鼻が恐しく長く、耳が廣く眼が小さいと、人から云はれたが、如何な形をして居るものかな、この象はおとなしいから大丈夫、側に寄つて觸つても、何にもしないよ。」

と、盲人の一人が云ふと、これは面白いとばかり盲人ども、象は如何な形をして居るか、話だけは聞いて知つて居るが、眞物は觸つたことがないから、一つ觸つて調べてやらうと云ふので、象の形を調べることになりました。そこで一番最初に老人の盲人が

「よろしい、一つ手探りで調べて答へませう、觸つて大丈夫ですね」と、云つて飾々な身格好をして、手探りで調べ出し、象の尾を探り當て、

「うん、判つた、／＼、判りましたよ、象と云ふ獸は妙な形をして居ますね、まるで箒のやうだ……」

と、云ひました、それを聞いた旅僧は可笑しさを耐へて、他の盲人のするのを見て居ますと、二番目に出た一人は、耳の方を探つて撫ぢゝ見て、不審さうに考へ

「これは妙だ、私は箒のやうとは思ひませんよ、まるで皮の風呂敷

のやうです」

と、云ひました

「うむ、妙うだ、お前さん達二人は、別々の答を云ふから判らない、どれ今度は私が一つ調べてやらう」

と、三人目の盲人が探りましたが、この盲人は足を探り當てゝ吃驚し

「いや驚いたぞ、これは大變だ、まるで枯れた大木の根株のやうだ」と、云ひました。怎う云ふ風に、三人が三人妙なことを云ふので、可笑しくもあり、可哀さうにもなつたので旅僧は、盲目とも一同に向つて

「ハハア御前さん方、なるほど盲人で見えないから無理もないだ、

象は箒のやうでも、風呂敷のやうでも、枯れた大木の根株のやうでも、何でもありません」

と、笑つて云ひますと、これを聞いた盲人どもは吃驚して、見えな目で旅僧の方を見

「ちやア一頭象は如何な形をして居るんです、教へて下さい」

と、云ふので旅僧は、よく判るやうに象の形を説明してから

「さア判つたらう、如何だい、何しろ象は恐しく大きい獸だ、なか／＼探つても探れないお前さん方が、いろ／＼探つて云ふのも無理

もないが、それはほんの一小部分を探り得ての話だ、もう判つたらそれで可い」

と、その饒旅僧は別れて行きました。

これは有名な印度の話だが、佛さまの御慈悲、御恩はこれと同じで、とても大きく、これが佛さまの恩だと云つて掘み出すは、到底

困難で、目に見えたり、手で探り當てられたりするやうな、佛さまの恩や御慈悲であつたらば、それは極めて小さなものと云ふべきであらう、若しこれが佛さまの御慈悲だ、難有いと云うて示すことが出来るものがあつたら、それは極々一小部分であつて、恰も盲人が象の尾を掴んで、これが象だと云つたのと同然で、誤まりも甚しい佛さまの恩や御慈悲の全部ではないのであります、畏くも 明治大帝陛下の御製に「目に見えぬ、神の心に通ふこと、人の心の誠なりけり」とあるを拜しますが、これこそ佛さまの寶、三寶の一つであつて、その心の働きで、動く日常の人々の行爲が、この佛様の恩に報ゆる所以であります。されば佛さまの御教を守れば、父母の教訓を誠心こめて守ることになるので、佛の恩は難有く、廣大無邊なのであるから、これを信じその恩や慈悲を受け、感謝して正しく行ひ働くべきでせう。これも難有い佛さまの御心の話です。釋尊の御弟子が多くあつた中に、阿那律と云ふ偉い人がありました。この阿那律がまだ偉くならない時のことです、釋尊が多く御弟子を集めて佛さまの話をして居ますと、何時もこの阿那律は、定まつたやうに居眠をするのです、そこで釋尊は或日阿那律が居眠を見られて、それを揺り起し目を覺ませ、驚き恐れ入る阿那律に、やさしく聲をかけられ、にこ／＼しながら

「これ阿那律、お前は何時も私が話をする、定まつて居眠をする、そんなことでは立派な人にはならぬぞ」と、云はれて戒められました、すると偉くなる位の人ですから、阿那律はこの失敗を恥しく後悔して、これは飛んだ失敗、一生の恥辱だ、もうこれからは決して居眠はしないと、堅い決心をして改心し

それから一生懸命に、夜も疎々寢ずに修行しましたから、可哀さうに眼を悪くし、手當の功もなく盲人になつてしまひました、それでも不自由の身になつても、修行を一層勵みましたので、徳を積み立派な人になりました、すると或時、釋尊が側で教を聞いて居ました阿那律を見られると、綻びた法衣を纏ふて居たので

「あゝ可哀さうに、盲人の不自由、情なさに法衣が綻びて居るのも知らずに居るのか、誰か縫つてやれば可いか、縫つてやる者はないと見える」と、思はれて阿那律に

「これ阿那律、お前の法衣は如何した、綻びて居るではないか」

と、訊ねられましたので、それとは知らずに居た阿那律は、釋尊の御言氣に驚き恐れ入つて

「いや綻びて居りますが、つい知りませんでした」

と、お詫びをすると、それを制へて

「いや／＼恐れ入らんでも可い、盲人のお前が知らんのは無理もない」

と、云はれて阿那律は、いよ／＼恐れ入つてしまひ、見えぬ眼で四邊を見廻し

「あゝ誰か、面倒ぢやアが、私の法衣が綻びて居る、一寸縫つて下さるまいか」

と、頼みますと、これはまた如何したのか、居並ぶ人々は、誰も縫つてあげやうと云ひ出すものが一寸ありませんでしたところ、釋尊は阿那律が可哀さうに思はれ

「これ／＼誰か針と糸を持つて來て呉れ」

と云はれて針と糸を取り寄せられ、阿那律の側に進み寄せられ

「ア私が縫つてあげやう……」

と、阿那律の法衣に手を、縫ひた所を握りましたから、一同は意外の事に驚き、苦い思ひをして顔を見合せて居ましたが、當の阿那律はいよいよ恐縮してしまひ

「いや／＼勿體ない、そんなことをなさいましては罰が當ります」と、切りに断るのを

「いや／＼然う遠慮するのぢやない、佛さまの心が、私に縫へと云はるゝのぢやない、これが佛さまの御心ぢや」

と、云つて釋尊に自ら御弟子の法衣の縫ひを縫はれたのです、尊い佛さまの御心は、これでも判るでせう、佛さまは教を守り、正しき行爲をする人は勿論、罪惡を悔ひた人々も、一視同仁に慈悲を顯示される、何と廣大無邊の難有い、尊い御心と思ひ、感謝せずには居られないでせう。

下

三寶の恩の第二は法である。法はみのりとか、のりとか、みのり道とか云ふが、教と云ふことで、佛敎で云ふ三寶の一つ法は、佛さまの説かれた法即ち教へであると、云ひ得やう、而して今我等が佛さまの説かれた法、教を聞き悟り、難有いと感謝しつゝ、これを守つて日常正しい行爲を行ひ、その恩に報ゆべきで、これにはこの法即ち教へを習ひた經文に依らねばならない、説かれた人は遠い昔の人で、現世に存在されず、唯だ説かれた法のみが現存、難有い御敎が傳へられて居るのみで、三寶の一つである法こそは、經文であるから經文は佛さまの御心として、佛さまと同様に難有い尊いもので

あることは、今更に説くまでもないと考へる。經文は所謂御經であつて佛さまに捧げる誰もが誦する御經で、その種類は極めて多く、一卷の小さいものから幾百巻の大きいものがあります、般若經とか阿彌陀經とか、大日經とか、なか／＼多く數へ切れません、然し何れの經文も、佛さまが我等が守り、それに従ひ正しい善い行爲を、日常行ふやうに教へられたもので、修身齊家治國のことさへ書かれて居る尊い御敎であります、而してこの經文即ち經典中には、兎の餅搗きと云つた。兒童向の面白い話、童話としても充分價值のある話も多いのです、されば尊い佛さまの御心を知るには、如何してもこの經典を讀んで、これを理解して活用せねばなりません、徒に經文を讀むのでは、論語讀みの論語知らずになつて、折角難有い尊い佛さまの御心を知得することが、到底出来なくなるのであります、寺院に參詣し、佛像を禮して、僧侶が捧誦する經文を聞き、その何たるを解せずして、徒に難有がるのは、まだ／＼眞の佛さまの御心を知得し得ないからで、これは智識が低い人々だから仕方ないが、智識階級の人々は、經典の講究が、信仰上には必要缺くべからざることと思ふ。我日本國では、聖德太子の御代から、既に經典の難有き尊きを知得し、佛さまの御心は經典で知得すべきであるとして、經典を讀むやうになり、それが盛であつて、經文を誦すると云ふことは、經文で佛さまの御心を知得し、それで感謝報恩の意を致すとされて居ますから、かく教へられた人々は、佛さまに對して一巻の經を捧げるのです、然し難しい多數の經典は、なか／＼一般人のこれを能くすることが出来難いので、日夜佛さまに奉仕する僧侶を煩はして、讀經して貰つて居るのは、昔も今も同一であります、従つて

佛さまの御教は難有いものと、非常に尊ばれて畏三すので、既にこの世を逝いた亡き人々の靈にも、この難有い御教を教へたならば、その靈も定めし佛の功德で安らげく居られる、成佛が出来たらうと、故人を思慕する人の心から、亡き人の靈前、位牌の前で讀誦するのであります、亡き人のための讀誦は、成佛せよとの心からと云ふが、成佛とは佛の如き人になれと云ふことで、それで讀誦して佛さまの御心を傳へ教へて、成佛させやうと云ふのだと解したいのである。されば昨年丁〇〇〇の東京中央放送局から、各宗の名僧智識の方々を煩はして、聖典講義の放送があり、全国に中繼されたが、實に結構の盛事であれば、經文た講義されたもの、放送を聴かれた人は、佛さまと同じ行爲を行ひ、同じ徳を持つて、美しく朗かに日々を送らねばなりません、今からでも遅くはない、放送を聴かぬ人々は、放送された講義が今は一冊の寄物に纏つて刊行されて居るから、それを讀まれて欲しいのである。昔からこの經典を考究され、佛さまの御心を心された立派の方々は、なか／＼多いので、本願寺の開祖の親覺聖人や、日蓮宗の祖の日蓮上人などは、何れも經典を考究された方で、誰も知る偉い立派な方々ですが、またこの他にもかう云ふ人は数多いのであります、經文を讀んで佛さまの御心を知り、その廣大無邊の御慈悲に浴し、これに感謝して善行をすることを得るのは、法の恩であると云ふべきで、經典は難有い尊い御教へなのであります。

三寶の第三は僧である、僧は僧侶で俗に世人は坊主とか、坊さんと呼んで居る。僧は彫まれた佛の姿をした佛像でもなければ、紙に書かれた御教の經文でもない、佛さまに仕へ、佛さまの心を心とし

佛さまの教を傳へ導く人間なのである。僧は人間が普通一般の人とは外見が違ふ、頭髮を剃つて圓頂となり、法衣を着て珠數を手にして居ると云ふ姿で、一見普通人とは直に識別し得られる。然しこれは外見の姿であつて、これは印度人の風俗の一つ、印度の僧侶の姿、釋尊の御弟子の姿と同一なのです、外見の姿は然うでも僧侶の身分は、實に尊いものであります。即ち佛さまと同じ法衣を身に纏ひ、佛さまの御教、經文にある御教を守り、佛さまに日夜隣近く奉仕して、自らに行爲を正しく、佛さまの御心を己が心とし、衆生の一般人を佛さまと同じに教済し教導して行くので、これは僧侶を除いては、何人も出来得ないことで、僧侶の身分の尊い所以である。されば我等一般の世の中の人は、名僧智識と云はるゝ偉い僧侶、高僧の方々は勿論、正しい清い僧侶の考へと、その人々の自身示された一事でもが、それを眞面目に守り手本になれば、何時かは自然に我也亦た佛さまのやうな、立派な尊い人になり得るのであると考へる如何に旅をする人が、道にあつて道しるべと云つた河標もあり、行くべき道筋をば、親切に書き示されてあつても、それを讀んで旅する人よりも、道筋を知り教へ導いて、手を曳いて案内して呉れる人があつたら、如何程との旅人は安心して旅行し得ることかは明白であります、されば佛さまの教を知り御慈悲を受け、それを感謝し報ゆるに努むる我等は旅人であり、僧侶は手を曳いて連れて行く案内の人であると云つて可い。されば佛さまの道を知るべく我等には、所謂連れて行くこと云ふ使命を果すべき僧侶の行爲を目撃して行くのが、何よりの捷徑である故、僧侶は我等衆生の心を教済すべき主であり人の世の道の案内であるから、これを費として尊敬し、その恩に報

ゆるのは豈し當然であると共に、僧侶の責務は甚大と云はねばならない、三寶の恩に僧の恩を加へたのも、これが故である。

今は昔、道元禪師と云はるゝ尊い偉い上人が居られた、山の麓の寺に住まれて居たが、山には地から湧く水が非常に多かつたのですところが禪師はこの豊富の湧き水も粗末に使はれず、顔を洗ふ場合などには、洗つた残りの水は捨てずに、その附近に生えて居る樹の根に静かにかけて遣られました、それを見た寺男が

「上人様、なんでそんな事をなさいます、この山には湧く水が澤山ありますから、お顔をお洗ひなすつた後の水は、御遠慮なく御捨て下さい。」

と、云ひますから、禪師は笑ひながら寺男の顔を見られ

「まア何と云ふ勿體ないことを云ふのぢや、この水の御蔭で、私どもは尊い佛さまの教を守つて居るのぢや」と、云はれて強い信念を示され

「何でも物は粗末にしてはならんぢや、澤山あるからと云つて、無駄に使ふやうな人は、まだみ佛さまの御徳が身に具つて居ないからだ、一杯の水でも無駄に使ふ人は、時間もつまり無駄に使ふし、一生を無駄に使つて、何一つ出来かずに、死んで行かねばならん判つたかな」

と 懸に諭されましたが、禪師は人にだけ、怨う云つて諭されるばかりか、御身自らもちやんとこの事を實行されたのであります、そして世の中に有るとあらゆるものは、總て佛さまの賜物、これを尊びこれを敬ひ、これを粗末にせねば、其處には佛さまと同じ心が、何時しか自分に湧き出て、行ふことと思ふことは悉く佛さまの御心に

御教に従ふやうになり、知らず／＼の間には、立派な心になつて、三寶に對する御恩に報ひ得る行ひとなるのであります。

佛法僧これを三寶と云ふが、既に説述した如く、難有い尊い佛さまへの報恩と云ふことになるが、これを考へ思ひ合すると、唯だ誠心誠意を持つて、眞面目に行ふに他ならないのである。されば如何なる事でも、誠心誠意を盡くして行へば、それが即ち佛さまの御心に叶ひ、佛さまに悦ばれる行爲となるのであります。兎角この世の中と云ふものは、自分勝手に生活して行けるものでなく、自己一人の力のみでは、如何なる小さい事も成功は難しいのです、殊に人間には悪い心や邪な心が、明るいい心を暗くして、罪を犯させるものであり、惡魔が跳梁して、人を誤まらしむるのですから、佛さまの御心を心として、これに抗し強く正しく生活すべきであります而して恩を一日も忘れてはなりません。四恩と云ひ三寶と云ひ、何れも報ひねばならぬ恩である、世の中の人々は、よく口に恩と云ふことをするが、やれこの御恩を忘れませんか、御恩のほど厚く感謝します等々、なか／＼多く恩を口にする、それほど恩は大切なもの、人間と生まれて恩を忘れるほど罪惡はありません、華嚴經の中に、「恩を知らざるものは多く横死に逢ふ」と云ふ意味の文句がある、恩を知らざる者、恩を忘れる者は、何でも多く災難に逢ふたり、人から傷害を受たりして、人生の途中斃れると云はれて居る、これに反して、華嚴經の中には、「夢にでも父母や老師の夢を見るものは幸福である」と、云ふ文句があつて説かれて居る、畢竟佛さまの御教は、知恩報恩に盡きると云つて可い、かの有名な徳川時代に於ける國語學者、伊勢松坂人で本居宣長先生は、人も知らぬかの、数島の大

和心を人間は、旭に匂ふ山櫻花」と云ふ一首の和歌を詠じ、世界に比なき日本國民の誇りとして、傳統的に把持する大和魂を、世界に誇り示された和歌の作者だが、先生の母堂は大の如來佛を信仰され、或年信濃の長野に行き善光寺に參拜されたが、難有さの餘り「眞實に善光寺の如來さまは有難い佛さまだ、一層のこと尼になつて此處に居てお仕へしやう」

と、思はれたが、家は松坂に在り、宣長と云ふ立派な息子さんが居て奉行して呉れる、それを考へると此處に止まることも出来難く、遂に剃髪して尼の姿となつて歸國し、それから家に在つて佛壇に向ひ、朝夕必らず佛さまや我家の位牌に禮拜回向し、長い／＼經文を一心不亂に讀誦され、佛さまの御恩を謝して居られました、それを親しく見られた宣長先生は

「然うだ、母上があんなに尊び拜んで居られる佛さまだ、あんな小さな佛壇の中にお置き申しては勿體ないし、母上に相濟まぬし」と、考へて早速一間の押入を破つて、そこ一杯の佛壇を造り

「母上、やつとこれだけのものが出来ました、どうぞ難有いお經を毎日あげて下さい」。

と、云ふと母上は先生の志を嬉しく感謝されて

「おう、これは難有い結構なこと、よう立派な御佛壇が出来ましたこれで佛さまや御先祖さまも、樂々とお住ひが願へませう、難有いことぢや」

と、涙をながして嬉しがられました、そしてこれまでよりも、一層熱心に、佛さまへの朝夕の御勤を勵まれ、先生もその側に常に座つて、母上が讀經される時は共に讀經して、佛さまの御慈悲を感謝さ

れました、それのみか先生は恩師加茂真淵先生が逝去されてからはその位牌を書齋の床の間に安置され、難しい字句や文章に接すると恩師の位牌の前に丁寧に御禮をして

「先生、この文章は如何云ふ意味で御座いませう、どうぞ御教へ下さい」

と、頭を下げたまま、自分でその意味を解し得るまで拜でん居られその意味を解し得れば、さも晴々しい顔色で位牌に對はれ

「先生、難有う存じました、御蔭で相判りましたから、これで本居も人から笑はれずにすみませう」

と、恭しく御禮を申されました

廣大無礙の佛さまの御恩は、我等は常に忘れず、これを受け得るの難有さを感謝せねばなりません、これが人間としての大きな責務だと思ふ。

●大業的立場から

日 滿 佛教協會の誕生

會長には大谷空圓師
兩國の文化的融合進む

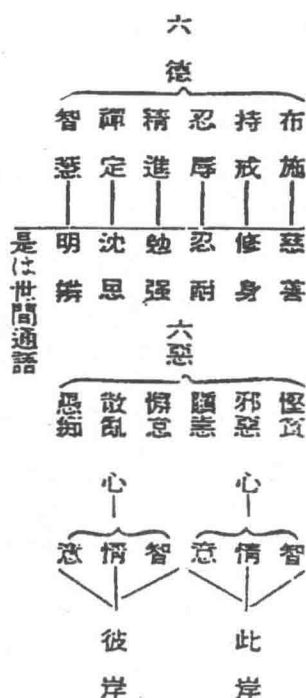
友邦滿洲國では佛教を國是としてその文化建設に努めつゝあるが佛教と同じくアジアの二大教派である佛敎をもつて等しく社會教化の羅針盤たらしむべしとて日滿兩國の佛敎徒が先般來協議を進めた結果いよ／＼「日滿佛敎協會」が生れることとなつた。會長には東本願寺連枝大谷空圓師が推される豫定が同協會では一衆一派に偏することなく一般佛敎的立場から、兩國における大衆佛敎の興隆に努め密接なる文化的融合を図らんとするものである。

修 道 第 一 義

貫 田 至 道



會長の命を御受け致して、本日より六時間の割を配せられ、皆様に修道の第一義と題してお話を致します。本日迄十二日間も永いお勉強でありますから心身共に御疲れたでせう。殊に目のお疲れが一番でありませう。何れの講習會員もお目が疲れると頭が次第に左右に震られる。次には前の方にお禮を致される。又隣のお方の頭と自分の頭とが打合つて火が出る様になる。此の發火の爲大火災を起すと消防や警察の方が驚ろかれて見に来る。原因は何かと尋ねられて皆さんの頭と頭の打ち合ひと云ふ事になりますから大變の起らぬ以前に私より注意を致して置きます。



修道第一義と題して六德行を一箇條づゝお話を致す事に致します。六德行とは六波羅密と申すので、波羅密は梵語であつて、支那の語に譯して到彼岸で、彼の岸に到る、煩惱忘想の此岸より迷を離れて生死流轉の河を渡り、涅槃寂靜の悟の彼岸に到るといふのが波羅密で迷の暗界の此の岸より悟の明界の彼の岸に到る事で煩惱の六惡行より解脱して六德行に精進する事でありませう。

六德行とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧で、六惡行とは(上記の)慳貪、邪惡、瞋恚、懈怠、散亂、普通の語でいへば、慈善、修身、忍耐、勉強、沈思、明辨と云へば、お分りでせう。

即ち此岸と彼岸の問題で凡夫の迷を離れて佛の悟の境界に入たので、世間普通の事柄にしても、野蠻酸味の此の岸から、文明進歩の彼岸に到るには、慈善、修身、忍耐、勉強、沈思、明辨の六ツが揃はなければなりませぬ。正しき智慧が得られる智情意の三が圓滿に作用き道德の完全、真正文明の彼岸に到達する大なる乗物を六徳に分けてお話申す。

今席は第一の布施仁愛の箇條に就いて申します。布施は和尚様に